

## 新しい道徳と日本の道徳

—ポリコレの時代と日本人—

能村晋平

### はじめに

2019年、中華人民共和国の武漢から発生した新型コロナウイルス感染症の災禍は瞬く間に世界を覆った。我が国も例外ではなく、未知のウイルスへの恐怖が人々を襲った。このような危機に際し、本来人々は助け合い、協働し、社会を存続させるように自らの力を発揮するよう務めるべきである。しかし、コロナ禍で目についたのは、極めて利己的・自己中心的な人々の行動であった。

テレビやネット空間で自分たちに都合のいいことばかりを話す専門家、責任逃れとバラまき、特定業種を優遇する政治家、コロナ対策に名を借りた予算の分捕り合戦に明け暮れる官僚。挙句の果てには国税庁の職員が給付金を詐取した罪で逮捕されるに至った。

腐臭は市井の人々からも漂った。「転売ヤー」、「自粛警察」、「マスク警察」、「俺コロナ」など枚挙に暇がない。

同時にコロナ禍は社会的弱者の存在をリアルに突きつけた。収入が減ったことにより生活状況が悪化した世帯、ひとり親家庭、日本語の不自由な外国人、近くに身寄りのない高齢者などである。これらの人々の窮状は、立場の弱い人を助けることを良しとする素朴な正義感を掻き立てる一方、政争の道具とされることもあった。

そんな中で行われた与党自民党の総裁選、つまり次期首相を決めるタイミングで、メディアは社会的に不自由な立場とされた女性や性的少数者の地位向上をしきりに訴えた。これらの人々は平時においても「生き辛さ」を感じていたが、それはコロナ禍でより明らかになったとして、諸外国との比較を織り交ぜながら日本がいかにか、女性やマイノリティに不寛容であるかを宣伝した。

また、近年もてはやされている SDGs においても、女性の管理職登用を増やすことが目標にされている<sup>1</sup>が、メディアはそれを錦の御旗の如く振りかざし、さらには政治に占める女性の割合、つまり女性議員の数を増やすことを目的としてクォーター制の導入へと世論を動かそうとしている。夫婦別姓の問題であっても、メディアは「女性の人権」という側面から別姓を推進し、同姓であることの不自由さを強調している。

性的マイノリティを示す「LGBT」には「Q」や「+」が追加され、従来の「男女」という分類すら差別的であるとされ、性的マイノリティへの差別的取り扱いがなされないように法律を整備すべきだという議論も巻き起こっている。これらの議論に共通するのは「欧米先進国では」という相対的評価であり、我が国の特性や文化・伝統を完全に無視した、令和版の欧化政策である。このような主張はマスメディアのみにとどまらず、SNS という新しい空間で大きなうねりとなっている。

いよいよ日本でも「ポリティカル・コレクトネス」(以下ポリコレ) という「新しい」道徳的価値観が本格的に猛威を振るいだしたのである。ウイルスは一般的には、感染が広がるのと比例して弱毒化する。ところがポリコレは感染を広げながら強毒化していくのである。後述するが、強毒化したポリコレが社会に蔓延したとき、文化や伝統、さらには自由は死に至る。

以上のような背景を踏まえて、本論では以下の二点について考察をしたい。

一つは、新しい道徳、世界基準として台頭してきているポリコレが、国家や文化に及ぼす致命的な影響である。

もう一つは、そんな「新しい」道徳に惑わされないための、我が国が持つ「国がら」という「伝統的な」道徳を考えることである。ポリコレによって我が国が死に至らぬよう、我々ができることを考えていきたい。

---

<sup>1</sup> 内閣府男女共同参画局「女性活躍と SDGs サステナビリティの実現に向けて」  
[https://www.gender.go.jp/policy/mieruka/company/pdf/yakuin\\_6.pdf](https://www.gender.go.jp/policy/mieruka/company/pdf/yakuin_6.pdf) (最終確認日: 2023年1月21日)

## 1. ポリコレ全体主義の道

ポリティカル・コレクトネス（ポリコレ）という言葉は「人種・宗教・性別などの違いによる偏見・差別を含まない、中立的な表現や用語を用いること。1980年代ごろから米国で、偏見・差別のない表現は政治的に妥当であるという考えのもとに使われるようになった。言葉の問題にとどまらず、社会から偏見・差別をなくすことを意味する場合もある」（デジタル大辞林）とされている。「スチュワーデス」が「キャビン・アテンダント」に、「看護婦」を「看護師」に言い換えるのが身近なものであろう。

ポリコレは本来、一人一人の人権を重んじ、信仰する宗教や肌の色、性別といったもので差別をしないという、極めてまっとうな理念である。ところが現在では、ポリコレに名を借りた、マイノリティ、あるいは歴史的に弱者とされてきたもの—つまり性的少数者である LGBTQ+ や外国籍、女性等—への過剰な配慮が生じている。そしてこれらの人々に対して「配慮」することが、進歩的な価値観であり、道徳的な行為とされている。逆に、「配慮」が不十分であったり、過剰ではないかと考えることは前時代的な古い価値観であり、ややもすれば不道徳な行いとして糾弾される。

アメリカ合衆国においては特にその傾向が著しい。文化的な面では「メリークリスマス」を、非キリスト教徒に配慮して「ハッピーホリデー」という「中立的な表現」に置き換えている。また、過去の白人至上主義への反省のためか、ディズニーは実写版のアリエル役に黒人の女優を充てた。さらに下院ではジェンダーニュートラルな言葉を使用するという観点から、father や mother を parent に、son や daughter を child に置き換える法案を可決した。従来のおり、father や mother を使用すること自体を禁止しているものではないが、敢えて使用すれば「差別主義者」と誹られる可能性は低くないだろう。

事実、ポリコレに抗うかのように、トランスジェンダーの「元男性」の女性アスリートに対して厳しい目を向けたり、「メリークリスマス」を「復活」させたりした、先の大統領ドナルド・トランプは激しい批判にさらされた。

これは日本においても例外ではない。杉田水脈<sup>2</sup>、森喜朗<sup>3</sup>、河村たかし<sup>4</sup>は連日のようにメディアや SNS で袋叩きにあった。彼らを擁護する人々も同罪であり、同様のレッテルを張られて批判を浴びる。そのため、今ある生活や地位を維持したい人々ならば余計な反論はせずにポリコレに理解を示しておいたほうが無難である。

このように、ポリコレの名の下に行われる批判の嵐はなぜ、情け容赦なく、粗暴であるのか。そしてその粗暴さがなぜ許容されるのか。それは、日本のメディアの多く—特に朝日新聞や毎日新聞—や左派政党がポリコレの旗振り役を務めていることから見て取れるが、ポリコレを推し進める人々が所謂「リベラル」派であることに由来する。リベラル派の基本方針は「社会に対して恐怖を煽り、不正義を強いる保守主義に対しては、寛容の精神を棄てて徹底的に不寛容になるべきであり、反対に社会の進歩を掲げる左翼思想については、どこまでも寛容であるべきである」<sup>5</sup>というフランクフルト学派、特にマルクーゼの思想を源流としている。この方針に従い、自らに反対する勢力に対し、正義の名の下にゲバ棒ならぬ「ポリコレ棒」を振りかざすのである。

もちろん、先に挙げた三人の言動に配慮が足りなかったことは確かであろう。しかし、だからといって、その人の功績も人柄も人格すらも否定するような批判は、もはや誹謗でしかない。また、謝って終わり、というわ

<sup>2</sup> 衆議院議員。自由民主党所属。「新潮 45」2018年8月号に「LGBTはLGBTのために税金を使うことに賛同が得られるのでしょうか。彼ら彼女らは子どもを作らない、つまり生産性がないのです」と寄稿したことで批判が噴出。辞職を求めるデモや殺害予告を受けるなどした。その後、同誌10月号で小川榮太郎をはじめ、杉田を擁護する寄稿が掲載されたことでさらに批判が集中。最終的に同誌は事実上の廃刊となった。

<sup>3</sup> 第85・86代内閣総理大臣。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長在任中の2021年2月3日「女性がたくさん入っている理事会は、理事会の会議は時間がかかります」などと発言したことが「女性蔑視」として批判され、発言の撤回と謝罪を行ったものの批判は止まず、同月12日に会長を辞職した。

<sup>4</sup> 第85・86代内閣総理大臣。東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会会長在任中の2021年2月3日「女性がたくさん入っている理事会は、理事会の会議は時間がかかります」などと発言したことが「女性蔑視」として批判され、発言の撤回と謝罪を行ったものの批判は止まず、同月12日に会長を辞職した。

<sup>5</sup> 福田ますみ（2021年）『ポリコレの正体』方丈社、64頁。

けにはいかないのも気持ちとして理解できるが、SNSの上では「辞職を要求する」「責任を取れ」といった文言が並び、彼らを社会的に抹殺する意図が感じられる。要するに、どこかで許す、終わりにするという「落としどころ」がなく、表舞台から姿を消すか、全面的に屈することだけが解決策になるのである。

前述した三人をめぐる騒動の中で最も恐ろしいのは、森元首相の「無意識の偏見」を指摘する声である。「無意識の偏見」は「アンコンシャス・バイアス」とも言われ、近年では大手企業を中心に研修材料にもされている。例えば、「女性は感情的、男性は論理的」といった考えは「偏見」である。また、誰にでもある、なくすことはできないが、気づくことがその対処への第一歩<sup>6</sup>であるから、気づいた人から声を上げていくことが推奨されている。字面だけ見ればなるほど、もっともなことではあるが、「アンコンシャス・バイアス」には、本人にそのつもりがなくても「あなたには無意識の偏見がある」と言われてしまえば反論ができないという恐ろしさが潜んでいる。「そんなことはありませんよ」といったところで、「そんなことはない」と思っているから無意識なのだ」と反論され、さらに「偏見」に結び付けられそうな過去の発言—これには時効はない—を掘り起こして示されれば、潔白を証明することは不可能に近い。

過剰なポリコレによって、何気ない一言が猛烈な批判を生み出し、さらには過去の発言が掘り起こされて新たな批判の火種となる。我々はまさに「文化全体に地雷がしかけられている」<sup>7</sup>地雷原の中を歩いている。その結果、言論は自らを傷つける恐れを持ち、表現は委縮する。剩え思想までもが—それが無意識であったとしても—「ポリコレ警察」に取り締まれるようになる。そうして生まれるのは、思想の自由も表現の自由も失われた「ポリコレ全体主義」である。「ポリコレ全体主義」の先には「共産主義」のディストピアが待っているのである。

---

6 内閣府男女共同参画局『令和3年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究 事例集』  
[https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu\\_r03/04.pdf](https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu_r03/04.pdf)（最終確認日 2023年1月21日）

7 ダグラス・マレー著、山田美明訳（2022年）『大衆の狂気』、徳間書店、19頁。

なぜポリコレと共産主義が関係するのか。これは前述したとおり、ポリコレを推し進めているのは所謂「リベラル」勢力であることに関係している。

かつては資本主義が成熟すると社会の矛盾が生じ、結果として共産主義が誕生するという「神話」があった。しかし、実際には資本主義が発展しても一向に革命は起こらない。そこで、「社会主義闘争には、女性解放運動のような『新たな社会運動』が役に立つということ」<sup>8</sup>に着目した。資本家と労働者の搾取・被搾取の関係を、男性と女性、異性愛者と同性愛者、白人と有色人種、マジョリティとマイノリティに置き換えたのである。経済と違い女性やマイノリティの「生き辛さ」を強調するため、感情面で否定しにくいということがポリコレの強みであろう。

このようなポリコレは、現代において「新しい価値観」「進んだ道徳」となりつつあるが、ポリコレの根底にあるのは「多様性」という概念である。昨今、この言葉をいたるところで耳にするが、実はこの「多様性」という一見耳ざわりの良い言葉こそ、全体主義への一里塚なのである。

## 2. ポリコレと多様性

多様性は「いろいろな種類や傾向のものがあること。変化に富むこと。」(デジタル大辞林)を指す。多くは「多様性の尊重」というように使われることが多いが、要は「みんな違ってみんないい」といった意味である。これ自体は理想的であり、社会という集団で生きる上では大切な価値観といえる。ところがポリコレと結びつくと、属性を理由にした不利益や偏見を許すしてはいけない、という意味を持つようになる。そして多様性の名のもとに、それまで虐げられてきた(と思われる)人々やマイノリティをドラスティックに復権させよう、優遇しようという政治的な動きに結びつく。しかし、多様性の尊重の名のもとに少数派をただ優遇すればいい、というあり方は本当に公正といえるのか。

例えば、文科省は理工学部的女子生徒を増やすべく従来より通知を出し

---

<sup>8</sup> マレー、前掲書、110頁。

ている<sup>9</sup>が、それに呼応するかのように名古屋大工学部が、令和5年度入試において、学校推薦型選抜の募集定員の半数を女子に限定する方針を示した。しかし、現実では高校段階で理系を選択する女子生徒は男子生徒に比べて少ないため、男子生徒への逆差別ではないかという批判もある。女子の入試優遇によって理系学部から文系学部に進路希望を切り替える男子も存在するだろう。その結果、本来、同大学の文系学部へ進学できたはずの女子が不利になるということも十分に考えられる。

別の例では、東京オリンピックの重量挙げに「元男性」のトランスジェンダー、ローレル・ハバード（ニュージーランド）が「女性」として参加したのも記憶に新しい。このようなトランスジェンダーの選手が「新しい性」の代表選手としてスポーツの大会に参加する流れは拡大しつつある。ハバード選手は記録なしという結果に終わったが、今後、勝てる可能性のある女性選手が、「元男性」の選手に敗れることになれば、その無念さは察するに余りある。

また、ミスコンを「ルッキズムを助長する」として廃止した大学も少なくない。容姿は人それぞれなのだから、見た目の美醜で優劣をつけることは多様性に反するからである。しかしこれではまるで「美女」であることが悪であるかのようである。もちろん、人間は内面が大切ではある。しかし現実には美女（男）で得をすることや、容姿が判断に影響を及ぼすということは大いにあり得ることである。クレオパトラの鼻の高さが歴史を動かしたというのは、真相はともかく、現実的な喩えでもある。にもかかわらず容姿の美しさを否定するのは、それこそ差別的であり、行きつく先はクメルルージュの狂気である。

日本共産党の志位委員長は令和3年の衆院選における街頭演説の際、共

---

<sup>9</sup> 令和4年6月3日付け4文科高第302号文部科学省高等教育局長通知「令和5年度大学入学者選抜実施要項」の「第3 入試方法」2項(5)「多様な背景を持った者を対象とする選抜」に「入学者の多様性を確保する観点から対象になると考える者（例えば、理工系分野における女子等）を対象として、入学志願者の努力のプロセス、意欲、目的意識等を重視し、評価・判定する入試方法」とある。  
([https://www.mext.go.jp/content/20210617-mxt\\_daigakuc02-000010813\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20210617-mxt_daigakuc02-000010813_1.pdf))  
(最終確認日：2023年1月21日)

闘する野党との「多様性の統一で新しい政権を」<sup>10</sup>と発言した。「多様性を統一する」という、自由や個性の否定ともとれる発言であるにもかかわらず、ほとんど問題にされることはなかった。選挙のために深く考えずに発言した、一種のリップサービスなのか、あるいは何らかの信念があつての発言—だとしたら非常に恐ろしいことだが—なのかは不明であるが、多様性という言葉があまりにも軽く使われている感は否めない。いずれにしても、ポリコレを声高に叫ぶ者の正体見たり、である。

結局、「新しい価値観」「進んだ道徳」であるポリコレは多様性を重んじると言いながら、多様性の名のもとに、特定の属性にあるマイノリティを優遇することで、他を圧迫したり、不利益を及ぼしたりするため、人々の間に溝を作り、社会を分断することとなる。また、違いに配慮するあまり、却って違いが均一化されるという面もある。「まことに平均的で均一化された、貧寒とした内装」<sup>11</sup>の「今や世界中どの街にもあろうかという、とある有名なカフェ・チェーン店」<sup>12</sup>が「無味乾燥」ではなく、「先進的」で「クール」であると若者に捉えられていることは、個性の均一化、ひいては文化の喪失が受け入れられつつあることを示している、というのは考えすぎだろうか。

以上、ポリコレにおける多様性について見てきたが、実際、社会には様々な人が共に生きていることは現実である。このような社会において、多様性をどのように考えていくことが望ましいのか。私は我が国の伝統的な特性でもある和の精神がヒントになると考えている。

この「和」は「互いに独立した平等な個人の機械的な協調ではなく、全體の中に分を以て存在し、この分に應ずる行を通じてよく一體を保つとこ

---

<sup>10</sup> 「野党はそれぞれ異なるところもありますが、互いによく理解し合い、リスペクトして、一致点で協力することが一番強い。それが多様性の統一です。多様性の統一で新しい政権をつくろう」（しんぶん赤旗 2021年10月24日「多様性の統一で新しい政権を」）([https://www.jcp.or.jp/akahata/aik21/2021-10-24/2021102401\\_01\\_0.html](https://www.jcp.or.jp/akahata/aik21/2021-10-24/2021102401_01_0.html))（最終確認日：2023年1月21日）

<sup>11</sup> 田中英道（2017年）『日本人にリベラリズムは必要ない。』KKベストセラーズ、109頁。

<sup>12</sup> 同上。



ろの大和」<sup>13</sup>であり、「各々その特性をもち、互いに相違しながらも、而もその特性即ち分を通じてよく本質を現じ、以て一如の世界に和する」<sup>14</sup>もので、「その特質を發揮し、葛藤と切磋琢磨とを通じてよく一に歸するところの大和」<sup>15</sup>なのである。特質があり、切磋琢磨の中で、和の内容は豊かになり、「個性は彌々伸長せられ、特質は美しきを致し、而も同時に全體の發展隆昌を齎す」<sup>16</sup>ことになる。

つまり、自らの分に応じて、特性を伸長させることで公益に資することになる。近年では苦手をなくすより得意を伸ばす、ということがよく言われているが、日本人の和の精神から見ても抵抗なく受け入れられるのではないか。一方で、和を実現するためには個人主義を超えなければならない。そのための指針となるものは、歴史であろう。和の精神は「我が肇国の事實及び歴史の發展の跡を辿る時、常にそこに見出されるもの」<sup>17</sup>だからである。

ところが、ポリコレは歴史にも干渉し、過去を否定する。次章ではポリコレと歴史の関係を考察することで、ポリコレによる歴史の改変に対するワクチンとしたい。

### 3. 歴史に対する贖罪としてのポリコレ

歴史には光の面と影の面がある。影の面を学び、受け入れることで未来につなげていくことが健全なあり方である。しかしポリコレは光の面をも否定し、影の面を現代において償うことを要求する。

アメリカ合衆国の、自らの国の歴史に対する姿勢はその好材料である。

アメリカ大陸は 1492 年にコロンブスが到達したことで白人世界に組み込まれ、その後、1620 年のピルグリム・ファーザーズの入植からアメリカ合衆国の歴史は本格的に始まる。周知のように、合衆国は先住民を迫害し、

---

<sup>13</sup> 文部省教学局（2018 年）『国体の本義・臣民の道』呉 PASS 出版，47 頁。

<sup>14</sup> 同上，48 頁。

<sup>15</sup> 同上。

<sup>16</sup> 同上。

<sup>17</sup> 同上，47 頁。

黒人奴隷を使用して繁栄したという歴史的事実を持つ。先住民や黒人への差別が歴史の闇の側面であるが、わずか400年程度の歴史しかない「新参」国家にもでありながら世界をリードする—今こそ陰りが見え始めているものの—国になったことは多くのアメリカ人にとっての誇りであるはずである。ところが、ポリコレは、陰の部分を強調することで、アメリカ合衆国の歴史そのものを恥ずべきものとみなし、徹底的に否定する。

例えばコロンブスは「徹底して救いがたい殺戮者」呼ばわりされて<sup>18</sup> コロンブスの大陸発見五百年(1992年)の記念行事はほとんど行われることがなかった。

また、建国者ワシントンは奴隷を所有していたために尊敬するに値しないものとみなされ、リンカーンは先住民の迫害の罪を問われ、ゲティスバーグの演説は顧みられることもない。我々の記憶にも新しいが、リッチモンドのリー将軍の像は—南北戦争時、奴隷精を指示した南軍の将軍だった「罪」により—、2020年のBLM運動の高揚を受けて引きずり降ろされた。

さらには建国の父、ワシントンすらも、自ら奴隷を所有していたことから今や非難の対象である。

私は別に、合衆国の歴史を賞讃しようというのではない。先住民の虐殺や黒人に対する—かつては日本人に対しても激しく行われた—不当な差別を擁護するつもりはない。しかし、400年も昔のことを現代から批判し、これまでの歴史認識を一方的に変更していくのはあまりにも乱暴だと思う。ポリコレには議論の余地はなく、現在の多様性の面からみて受け入れがたいことは、過去にさかのぼって否定するのである。

そして、このような歴史の破壊の一番の問題点はこのような歴史の破壊が教育によって行われることである。つまり、自虐史観に基づいた教育が「公的に」行われている、ということである。

公教育の目的の一つは、共同体や国家に対する愛着を養い、社会の安定を図ることといえる。「母を慕う気持ちは自然に芽生えるものだが、国家へ

---

<sup>18</sup> パトリック・J・ブキャナン著、宮崎哲弥訳(2002年)『病むアメリカ、滅びゆく西洋』成甲書房、208頁。

の愛情は教えられなければ芽生えない。子どもは学習することによってのみ、自分の属する国家を知る」<sup>19</sup>のである。にもかかわらず、「過去の栄光、偉大なる業績の記憶を消去し、代わりにかつて犯した罪を強調し、愛し崇拜していたものが実は忌むべき卑劣なものだったという新たな記憶を書き込」<sup>20</sup>むことで、「愛国心を粉碎し、国民を意気消沈させ、アメリカを解体すること。つまり歴史が国民を一つにするのではなく、過去の被害者の子孫と加害者の子孫に分割する」<sup>21</sup>という最終目標を達成しようとしているのである。

この目標、つまり国民の分断が達成されれば、国家は他国からの侵略を防ぐこともできなくなるし、社会は混沌としたものになってしまう。国民を分断して弱体化させるというのは毛沢東的戦略である。BLM 運動のリーダーの一人、アリシア・ガーザが創設した BFL (Black Futures Lab) は中国共産党寄りの組織である、華人進歩会 (Chinese Progressive Association, CPA) から資金提供を受けている<sup>22</sup>が、これを偶然の一致というにはあまりにも出来すぎた話であろう。

#### 4. 日本の歴史教育

以上のようなアメリカ合衆国の状況を、対岸の火事として見ていることは出来ない。現在、我が国の歴史教科書からは歴史上の人物の偉大さ、立派さを読み取ることは困難である。「歴史について、正しい理解に導き、伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛する態度を養う」<sup>23</sup>のに適しているとは考えられない。

例えば、小学校、中学校あるいは高校に至るまで、歴史（日本史）の教科書には人物の行った事業が淡々と書かれているだけで、ややもすると古

---

<sup>19</sup> パトリック・J・ブキャナン、前掲書、202頁。

<sup>20</sup> 同上、201頁。

<sup>21</sup> 同上、201頁。

<sup>22</sup> The Washington Times (Wednesday, September 16, 2020 )  
<https://www.washingtontimes.com/news/2020/sep/16/pro-china-advocacy-group-funds-project-headed-blac/> (最終確認日：2023年1月21日)

<sup>23</sup> 学校教育法第二十一条三項。

代から現代に至るまで、いかに貧しい民衆が権力者に苦しめられてきたかがあたかも階級闘争を暗示するかのように描かれている。さらには、我が国の祖先がどれだけ、朝鮮の人々やアイヌの人々、琉球の人々を虐げてきたか、周辺諸国に「迷惑」をかけてきたかが一貫して示されている。

近年、歴史が苦手だったり、好きでなかったりする子どもが多いといわれるが、自分の国の悪口ばかり書かれたような教科書を使っているから、勉強する気も起きなくなるのは当然であろう。反対に、書かれたことを素直に受け止め、「理解」した子どもたちはその後、大学へと順調に進学し、大手企業の社員や研究者、あるいは官僚となり国家の中樞を担うようにすらなる。つまり、国の意思決定のプロセスに関わる人々の中には—もちろん、全てがそうではないが—祖国の誇りを失った根無し草のような人が存在しているということである。そしてその数は決して少なくないということである。さらには、積極的に、我が国の過去の「蛮行」に対する贖罪をしようと企てる人も少なくない。自らの国をむやみに卑下することは、先祖代々脈々と受け継がれてきた価値観を否定である。そして、我が国においてはその価値観こそ、肇国以来の長きに渡り、多様性を抱きながらも一つの国としてまとまってきた、先人の「知恵」なのである。

ではその価値観はどのようなものなのか。それはGHQ進駐以前の歴史教育にあった、天皇を中心とした歴史の見方である。これは、日本が天皇（＝神）を中心とした国家であったため、あらゆる困難を神懸かりで乗り超えてきた、という精神論的・非科学的歴史観と捉えられることもあるが、決してそうではない。それぞれの天皇の御代において、何が起き、その時天皇が人々のためにどのような思いを抱き祈り、考えていたのか。また、時の為政者が天皇の家臣の一人として、そのような大御心をどう体現しようとしたのかという観点から歴史を捉える方法である。

このような歴史観の根底に流れているのは「真心」である。天皇は祖先たる神々を祀ることで民の安寧を祈り、民を哀れみ、慈しみながら政（まつりごと）を行う。天皇の臣下はそのような主上の意を汲んで政を輔ける。民も同様、日々の仕事にいそしみ励みつつ、一たび急あれば武勇をもって奉仕することで大御心に関わりを持つ。このような関係性に不可欠なのが

「真心」であり、最たるものが二度にわたる元寇である。大東亜戦争のさなかに改訂された歴史教科書「初等科国史」は元寇について「神風」と題して以下のように総括している。「時宗の勇氣，よくその重い務めにたえ，武士の勇武は，みごとに大敵をくじき，民草もまた分に応じて，国のために働きました。まったく国中が一体となって，この国難に当たり，これに打ちかったのですが，それというのも，すべて御稜威にほかならないのであり，神のまもりも，こうした上下一体の国がらなければこそ，くしくも現われるのであります」<sup>24</sup>。つまり，日本は神の国であるから，困ったときは神の助けがある，「神話」を説いているのではない。「分に応じて」力を発揮し，こころを一つにすることで神のまもりも得られるという，「国がら」を表しているのである。このような「国がら」が，日本古来の価値観なのだといえる。

ところで，現代と昔，とりわけ戦前を比べると，歴史の記述は大いに変わっている。

例えば奈良時代について，現代の教科書では貧しい人々の暮らしや防人の辛さを歌う和歌が紹介され，大仏建立も多くの金を使い，たくさんの人が使役させられたといった「被害者目線」で記述されている。一方「初等科国史」では貧しい人々を救おうとする光明皇后のエピソードや「海行かば」の歌がいきいきと表されている。前者は明らかにマルクスのな階級闘争の歴史解釈である。

なぜここまで正反対な記述が起きるのか。それは歴史教育の目的をどこに置くか，ということに集約されると思われる。現代の歴史教育の目的は日本子どもたちに対し，我が国がいかに窮屈な，悪い国だったのかを学ばせ，二度と外国，特に朝鮮や支那の国に「迷惑」をかけないように精神的に去勢することが目的である。だからいまだに「近隣諸国条項」に則った教科書検定が行われているのである。同時に古代から「階級」が存在することを強調し，暗に歴史を階級闘争として解釈させようとしているのである。

---

<sup>24</sup> 文部省（2019年）『〔復刻版〕初等科国史』ハート出版，85頁。

反対にかつての歴史教育の目的は何か。時期が時期であるから当然ではあるが、戦争を遂行するための小国民の育成を目的としている。しかし、よく言われるような「国のために死ぬ」ことを指導するのではない。日本という国がどのような国がらで、どのような価値観を重んじ、歴史上の人物がいかにか勇敢であつたか、高潔であつたかを記しているのである。このような価値観や人物の姿から、「生き方」つまり道徳を学ぶこともできたのであろう。

とはいえ、アメリカ合衆国同様、我が国でも自国の歴史を賛美する教育はポリコレによる集中砲火を浴びることになりかねない。ポリコレの観点からすれば過去に対する徹底的な反省と、償いこそが「正しい」姿勢だからである。人類の歴史上、戦争や争いがあったことは事実であるし、現代の倫理観から許容し難い出来事というのもある。しかしだからといって、何百年も昔の「過ち」を掘り出してきて、現代において新たな軋轢を創り出すことが有益なはずがない。

アメリカの大学では白人が黒人に対して行ってきた非道を償うことが授業の一環として行われている。また、黒人学生や女子学生はどれだけバイオレントな言葉を使っても許されるという現状がある<sup>25</sup>。なぜなら彼らは「虐げられてきた」からであり、「虐げてきた」白人男性は償わねばならないからである。今日在学している白人男性の学生がどれほど善良な者であっても、である。とても建設的とは思えない上、白人男性への人権侵害としか考えられないが、ポリコレはこれを是認する。是認し、分断を生み出すのである。

歴史を学び、古人の生き方に心を震わせる経験は、道徳心の育成にも大きく寄与すると思われる。以前、小学生に対する「憧れの人物」調査<sup>26</sup>で、漫画の登場人物が10人中7人を占めたことが話題となった。良し悪しは別として、そもそも誇りを持てる歴史を教えていないのだから当然の結果と言えるだろう。今や自国の過去を讃えるのは「危険」な行為であり、や

---

25 マレー著、前掲書、第3章を参照されたい。

26 ベネッセコーポレーション「進研ゼミ小学講座」調べ（2020年）。

やもすると過去に対する無反省な、不道徳な態度であるとさえみなされるから、学校—公私問わず—や組織において、誇りを持てるような歴史教育をするのは困難であろう。

公教育がこのような状況である以上、望みは家庭内での教育となる。子どもにとっての一番身近で原始的な社会である家庭こそが、礼儀や道徳、そして教育を担うことは、何ら不自然ではない。ポリコレに感染していない親により、文化や伝統、古くから重んじられている道徳を子どもへと伝えていくことが、ポリコレの蔓延る現代における、最後の道であるだろう。

ところが、この「家庭」をも、ポリコレは解体の対象とする。家庭の解体こそが、共産主義への第一歩であることは周知の事実だろうが、まさにポリコレによって、家庭は解体の危機に瀕するのである。同時に我が国においては、家庭は「国がら」を考える上で極めて重要な意味を持つ。家庭の破壊は我が国の「国がら」を最終的な破壊へ導く危険を孕んでいる。

## 5. 「家庭」について

我が国においては「我が国民の生活の基本は、西洋の如く個人でもなければ夫婦でもない。それは家である」<sup>27</sup>というように、旧来より「家」の概念が重要視されてきた。というのも、「家」は「現在の親子一家の生活に盡きるのではなく、遠き祖先に始まり、永遠に子孫によって継続せられる」<sup>28</sup>もので、「我等臣民は、皇祖皇宗に仕え奉つた臣民の子孫として、その祖先を崇敬し、その忠誠の志を継ぎ、これを現代に生かし、後代へ傳へる」<sup>29</sup>ことで「蒼生を愛養して、その衣食を豊かにし、その災害を除き、ひたすら民を安んずるを以て、天業恢弘の要務となし給ふ」<sup>30</sup>天皇につながるからである。このように、祖先は天皇の天業恢弘を—それぞれの分に応じて—翼賛したのであるから、子孫である我々が同じように天皇に仕える「忠」は即ち「孝」なのである。「まことに忠孝一本は、我が國體の精華であつて、

---

<sup>27</sup> 文部省教学局，前掲書，40頁。

<sup>28</sup> 同上，41頁。

<sup>29</sup> 同上，34頁。

<sup>30</sup> 同上，26頁。

国民道徳の要諦である」<sup>31</sup>ため、我が国では「家」が重要視されるのである。逆に、我が国の伝統的な家族のあり方が否定されると、「臣民」の「宗家」である皇室の破壊につながると言えるだろう。

一方、ポリコレを標榜するリベラルにとっては、従来の家庭は家父長的であり、子どもの人権を認めず、妻の立場が著しく弱い、権威主義的な唾棄すべき対象である。しかしこのような西洋的な家庭観は我が国の国がらには合致していない。逆に言えば、リベラル—マルキスト—は家の概念を破壊し、家族を個人と個人の寄せ集めとすることで、我が国の「国がら」を完全に破壊することができるのである。

近年、子どもの権利、自主性を声高に叫ぶ人々が多い。このような人々には専門家を自称したり、教育者を僭称したりする人々が多いから、メディアを通じた影響力が大きい。もちろん、子どもの基本的人権は尊重されなければならない。育児放棄や暴力を振るう親に対しては、子どもの人権を最大限、守らねばならない。しかし、例えばゲームやスマホにまで「権利」を適用したり、我慢しないことや単なる我儘を「権利」や「主体性」と称し許容することには違和感がある。元々、「基本的人権」という重い意味—人間の生き死に関わる意味—を持っていた「権利」という言葉が今日では卑俗化され、極めて軽い意味で濫用され、個人主義が徹底されている。そのため、親の意見よりも子の権利が優先され、親の威厳が失われ、家を継承するという考えが「古いもの」として一顧だにされなくなる。少子化が問題になっているが、経済的事実だけでなく、このような個人主義もその一端を担っていると筆者は考えている。

ところで、我が国は元来、祖先崇拜の伝統を持っている。お盆やお彼岸は祖霊崇拜が仏教と言結びついたものであるし、正月も祖先の霊をお迎えする行事である。祖先の遺風を顕彰し、祖先と向き合うことで自己を見つめ、子孫を思う機会が、一年を通して幾度とある。ところが今や、お盆や正月は「バカンス」になり下がり、仏壇を閉じたままにして海外へ旅行することも珍しくない。彼岸に至っては話題にさえされず、供え物がスーパ

---

<sup>31</sup> 文部省教学局、前掲書、45頁。



一マーケットの片隅で売られている程度である。

実際、2022年には、15歳から29歳を対象としたのインターネットアンケートで、お盆は何をする期間か「知らない」と答えた人が4割以上という結果が出ている<sup>32</sup>。「知っている」という6割にしても、単に「盆踊り」や「帰省」といった本質とは異なった理解をしている可能性もある。文化破壊は着実に進んでいる。

公教育がポリコレに屈する以上、我が国の歴史や文化、伝統、国がらといったものを伝えることができるのは家庭である。同時に、我が国の「国がら」の根本は家庭にあると言っても過言ではないだろう。「親は子の本源であるから、子に対しては自ら撫育慈愛の情が生まれる。子は親の発展であるから、親に対しては敬慕報恩の念が生まれる」<sup>33</sup>といった、我が国古来の「自然の関係」を受け入れることで、家庭の破壊を阻止しなければならないのではないだろうか。

## 終

現代はSNSの普及もあり、あらゆる情報がすさまじいスピードで、且つマスクングされることなく共有されるようになった。戦争や差別、ハラメントの生々しい映像や証言を受け取ったとき、多くの人々は正義の声を上げる。そのほとんどは道徳的な感情から生じるのであろう。ところがこれらの映像や証言が、切り取られたものであったり、意図的に歪曲されたものであったり、背景の説明を敢えてされずに伝えられている可能性は否めない。正義や道徳心からの言動が、これまでの文化伝統を破壊することになる危険性を孕んでいることを、我々は十分に理解しなければならない。

我が国のことを欧米と比して「遅れている」と評する人は多くいるし、官僚や政治家、専門家と称する人々でも、「欧米諸国では」「グローバルス

---

<sup>32</sup> トレンダーズ株式会社（2022年7月29日）<https://www.trenders.co.jp/wp-content/uploads/2022/07/ae390127ff40f570cb1fd38dba914b19.pdf>  
（最終確認日：2022年1月23日）

<sup>33</sup> 文部省教学局，前掲書，42頁。

スタンダードは」と何かにつけて口にする人が多い。しかし、そもそも 2600 年以上、統一王朝を戴いている歴史のある国は日本以外に類を見ない。内乱はあれども、支那大陸や西洋ほど血みどろの歴史でもない。そんなある意味「特殊」な日本という国において、欧米や世界と比較する意義がどの程度あるのか疑問である。私は決して、盲目的に我が国の特殊性を賛美したり、他国と違って優れている、と主張するのではない。単に事実として違いがあり、特殊性を持っている、と考えるに過ぎない。この違いや特殊性を、グローバルスタンダードに合わせたところで、本当に国際社会に貢献できるのか疑問なのである。同時に、何千年何百年と続いてきた文化や伝統を、せいぜい数十年の歴史しかないグローバルスタンダードやポリコレのために棄ててしまっただけで本当に良いのかを問いたいのである。

そして、このような特殊性を放棄するための議論こそ、女性の権利、個人の理由を掲げて行われている「夫婦別姓」や「女性天皇」あるいは「女系天皇」、さらには「皇族の人権」である。これらはあたかも、女性や皇族の方々のためを思っているそぶりを見せるが、究極の目的は日本国の歴史、文化、伝統である国体—すなわち「萬世一系の天皇皇祖の神勅を奉じて永遠にこれを統治し給ふ」<sup>34</sup>こと—とその精華である「一大家族國家として億兆一心聖旨を奉體して、克く忠孝の美德を發揮する」<sup>35</sup>という、天皇と臣民という関係性の解体である。

コロナ禍で国民の分断が浮き彫りになった今、再び日本人が一つになり、この「困難な時代」を乗り越えていかなければならない。そのためには我が国古来の「国がら」を見つめなおし、歴史を見直すことで、日本古来の道徳を見直し、西洋や世界基準ではなくわが国独自の文化や伝統を規準とした仕組みを再構築していかなければならない。

ポリコレ全体主義は最早、目の前まで迫ってきている。流れに身を任せ、ポリコレに感染してしまえば一時は楽かもしれない。だがその先にあるのはディストピアである。一方、流れに逆らうには、自ら傷だらけになる覚

---

<sup>34</sup> 文部省教学局，前掲書，7 頁。

<sup>35</sup> 同上。

悟が必要である。返り血どころか、時には文字通り、自らの血を流すことにもなり得る。自分がどの道を選ぶのか、我々は選択を迫られているのである。

[参考文献]

内閣府男女共同参画局「女性活躍とSDGs サステナビリティの実現に向けて」  
[https://www.gender.go.jp/policy/mieruka/company/pdf/yakuin\\_6.pdf](https://www.gender.go.jp/policy/mieruka/company/pdf/yakuin_6.pdf)（最終確認日：2023年1月21日）

福田ますみ（2021年）『ポリコレの正体』方丈社。

内閣府男女共同参画局『令和3年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシヤス・バイアス）に関する調査研究 事例集』

[https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu\\_r03/04.pdf](https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu_r03/04.pdf)（最終確認日 2023年1月21日）

ダグラス・マレー著，山田美明訳（2022年）『大衆の狂気』，徳間書店

しんぶん赤旗 2021年10月24日（[https://www.jcp.or.jp/akahata/aik21/2021-10-24/2021102401\\_01\\_0.html](https://www.jcp.or.jp/akahata/aik21/2021-10-24/2021102401_01_0.html)）（最終確認日：2023年1月21日）

田中英道（2017年）『日本人にリベラリズムは必要ない。』KKベストセラーズ。

文部省教学局（2018年）『国体の本義・臣民の道』呉PASS出版。

文部省（2019年）『〔復刻版〕初等科国史』ハート出版。

パトリック・J・ブキャナン著，宮崎哲弥訳（2002年）『病むアメリカ，滅びゆく西洋』成甲書房。

パトリック・J・ブキャナン著，宮崎隆弥訳（2021年）『超大国の自殺』幻冬舎。